

互いに寄り添いあう支援システムの充実

ー児童支援シートを使用した児童理解と支援チームの定着を通してー

増山 肇

(教職リーダーコース E223C008)

1. 研究の背景

文部科学省「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して」では、我が国の学校教育には、一人ひとりの児童生徒が、自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値ある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の作り手となることができるよう、その資質・能力を育成することが求められている。そのための学校の役割は、児童に対して「学習機会と学力の保障」「社会の形成者としての全人的な発達・成長の保障」「安全安心な居場所・セーフティネットとしての身体的、精神的な健康の保障」の3つの保障を学校教育の本質的な役割として重視し、継承していくことが必要であると提言している。

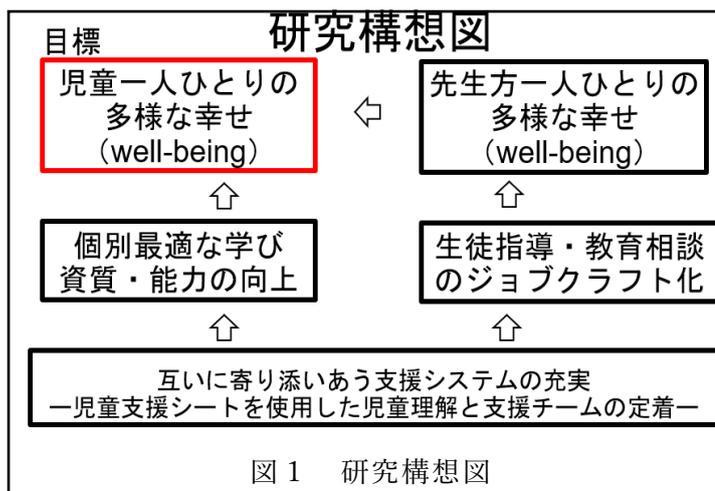
また、第二期群馬県教育大綱の基本方針では、多様な個性を持つ一人ひとりの子どもたちを誰一人取り残さず、第3期群馬県教育振興基本計画の基本目標「たくましく生きる力をはぐくむ～自らの可能性を高め、互いに認め合い、共に支え合う～」の下、生涯にわたり一人ひとりが持つ個性や能力を伸ばし、自ら学び、自ら考える力を育成するとともに、誰もが互いに多様性を認め合い、共に支え合う教育を推進していくと提言している。

以上のことから学校の役割は、多様化する子供たちを誰一人取り残すことなく、学校の役割である学力機会と学力保障、福祉的な役割を果たすことで、一人一人の持つ個性や能力を伸ばし、持続可能な社会に担い手になることができる児童の育成が求められている。

2. 研究の目的

学校の役割を果たし、多様化する子供たちを誰一人取り残すことなく一人ひとりの持つ個性や能力を伸ばし、持続可能な社会に担い手になることができる児童の育成をしていくためには、児童への支援を充実させていく必要がある。この支援を充実させていくことで、児童一人ひとりの幸せであるウェルビーイングは達成できると考える。ただ、児童のウェルビーイングを達成するためには、教師の頑張りは必要不可欠である。しかし、学校の役割を果たし児童を支援するために、闇雲に教師の仕事を増やしてしまうことは、児童のウェルビーイング達成にはならない。なぜなら、教師に余裕がなければ、児童に対してきめ細かなよりよい支援ができないからであると考えられる。

そこで、本研究では、児童のウェルビーイングを目標にし、目標達成のために、生徒指導・教育相談で何をすべきか考えた(図1)。学校の役割は、児童の個別最適な学びを保証して、一人ひとりの資質能力の向上をはかっていくことである。これらを実現していくために、本研究では、主題を互いに寄り添いあう支援



システムの充実とし、副主題を児童支援シートを使用した児童理解と支援チームの定着とした。児童支援シートを使用して、児童に関わる全ての大人で児童理解をし、支援チームを定着させることで、児童に対して場当たりの・消極的な生徒指導が計画的・積極的な生徒指導に代わり、生徒指導・教育相談をジョブクラフト化できるのではないかと考えた。

所属学年職員を中心として、家庭との連携に努めながら、児童支援シートを使用した児童理解と支援チームの定着を通し、互い（児童、教師、保護者）に寄り添いあう支援システムの充実の在り方について提言する。また、チーム支援に関しては、児童に対して大人だけがチームを組んで児童を支援するものではないと考える。そこで、児童にソーシャルスキルトレーニングを実施することにより、児童同士でも互いに寄り添い合うことができるようにしていく。

3 実践

互いに寄り添い合いながら継続的に児童支援を行っていくためには、児童と教師にとって有効な実践が必要となる。そこで次に挙げる3点を取組の大きな柱とした。

1 点目は、「児童生徒理解をはかるための取組」である。生徒指導提要には、「生徒指導の基本と言えるのは、教職員の児童生徒理解である。経験のある教職員であっても、児童生徒一人ひとりの家庭環境、成育歴、能力・適性、興味・関心等を把握することは非常に難しい。」と述べてある。そこで、複数の教師で複眼的な広い視野から児童生徒理解ができるように児童支援シートを使用し、情報を共有しながら児童理解を行っていく。

2 点目は、「支援チームの定着の取組」である。児童支援は、ある特定の人への支援だけでは、足りないことが多く、適切な時に支援できることは少ない。つまり、支援が必要な時

に適切な支援を行うためには、支援チームを定着していく必要がある。

3点目は、「ソーシャルスキルトレーニングの取組」である。児童を支援するには、児童に関わる大人だけがチームを組み支援するものではない。児童同士が支援し合うことができれば、より一層児童のニーズにあった支援が可能になり、児童のウェルビーイングの達成に近づくと考える。

そこで、これら3点を児童に関わる全ての人と連携しながら実践した。以下が、3点の具体的な取組内容である。

(1) 児童生徒理解を図るための取組

児童に関わる全ての大人で児童理解を行い、一人ひとりにあった児童支援ができるように次のことに取り組む。

ア 教師の日頃のきめ細かい観察力を記録し、児童生徒理解するための一日の出来事の記入と次年度への引き継ぎ

イ 児童生徒の心理面、学習面（興味・関心・学習意欲等）、社会面（人間関係・集団適応等）、進路面（進路意識・将来展望等）、健康面（生活習慣・メンタルヘルス等）を自己理解するための自己紹介カードの作成

ウ 児童への毎月1回アンケートの実施と児童へ定期的な二者面談の実施

エ 保護者への教育相談の実施と教育相談内容の記録

オ ローテーションでの道徳授業

(2) 支援チーム定着の取組

教師が一人で抱え込まずに、児童にとって最適なチームを組んで児童一人ひとりを支援できるように、次のことに取り組む。

ア 教師が一人で抱え込まずに、どんなことでも話せるようにするための学年作り

イ 学年、生徒指導・教育相談部会が機能するネットワーク作り

ウ 支援チームの次年度への引き継ぎ

(3) ソーシャルスキルトレーニングの取組

児童同士が互いに支援しあったり、SOSのサインが出せたりできるように、次のことに取り組む。

ア 児童同士が互いに支援しあったり、SOSのサインが出せたりできるようになるためのソーシャルスキルトレーニングの実施

4 検証

本研究は、児童のニーズに合った支援を行うための児童理解と支援チームの定着であり、その支援の結果、児童のウェルビーイングを目指したものである。アンケートや定量的な検証にはなじまないため、本研究について校内で行われた課題研究報告会で得られた意見を中心に検証を進めることとした。

道徳のローテーション授業や児童支援シートを使用した児童理解と支援チームの定着をすることのメリットについては、「クラス担任をしていると、例え、同じ学年の児童であってもあまり関わることがない。しかし、道徳の授業をローテーションで行っていることは、他のクラスの児童と関わりをもつことができ、児童理解につながるのではないか」、「児童支援シートには、各クラスの児童のプラスの情報も書かれている。良い面を積極的な生徒指導していこうっていう表れである。また、児童支援シートは、学年の先生が見て分かる程度の簡単なメモ程度で書いてある。丁寧ではなく効率的に行おうとしている。」などの意見があげられた。また、これらの実践を通して本研究は、「児童のウェルビーイングを達成させるためのきめ細かな支援と、同時に今求められているのは教員の業務改善働き方改革である。児童のウェルビーイングと教師の業務改善の両立をさせようとしているところにこの研究の価値があるのではないか」という意見が挙げられた。課題としては、児童支援シートの記入では、「特定の児童だけ目についてしまい、書く児童に偏りがでてしまうのではないか。その他の児童たちの児童支援や児童理解の手立てを検討する必要があるのではないか」などの意見が挙げられた。保護者との連携では、「児童を学校だけで変えていくというのは難しい。背景に保護者がいる。児童の行動にどのようにつながっているのかわかっているのが洞察するのが常々大事である。このことのやり方を間違ってしまうと、家庭が担うべきところまで学校が抱えることになってしまう危険がある。」という意見が挙げられた。

これからの研究の方向性として「多忙も時間的に切るというところは困難なところまできている。その中で、いろいろな多種多様な課題が次々に学校現場を沸き起こってくる中で、解決するにはチームで力を合わせて、一人ひとりがスキルをアップさせるということが必要である。更には、資質能力をみんなと一緒に高めていくことが必要である。その方法の一つとして、みんなで一つのことを考え合うっていうのはお互いのスキルアップになって能力が高まっていく。今回の研究を参考にし、様々な場面で体系的にできるようにしてもらいたい。」という意見が挙げられた。

5. 考察

本研究は、児童のウェルビーイングを第一の目標にし、この目標を達成するためには、先生方のウェルビーイングも大切と考えた。この二つの目標を同時に達成させるためには、児童に関わる全教師での児童理解と児童にとって最適な支援チームの定着である。教師がただ闇雲に頑張るのではなく、児童の情報を組織として共有し、その上で、適切なチーム支援を組み、児童を支援していくことについて提言していくことが目的であった。

児童理解では、児童支援シートに児童の記録を負担にならないように毎日記録をしてきた。その記録を元に、情報交換を学年で行ってきた。これらのことを一年通して行ったことにより学年3人の教師の複数の目で児童を見ることができ、支援することができた。また、休み時間や給食の準備を利用し、児童を見ながら学年で話し合いを行った。少しの合間を無駄にせず話し合いを行うことで、児童理解をするだけでなく、お互いの考えを知ることができ、相手を尊重することができた。このような積み重ねをした結果、どんな小さなことも話し合い、担任が一人で困ることのない学年ができた。また、チーム支援のチームは、大人だけがチームを組むのではなく、児童同士もチームを組むことがあると考え、児童へのソーシャルスキルトレーニングを実践した。すると、日常生活の中で「児童同士が互いに認め合う」「互いにほめ合う」「困っている人は積極的に助ける」等の変容が見られるようになった。教師のウェルビーイングについては、働き方改革を進める上での勤務時間は短くできなかったが、自分自身のウェルビーイングは達成できたと感じている。

最後に本研究の課題を2つ示す。一つ目は、この研究が学年を中心に行われてきたことである。学年を中心本研究を実践してきた結果、学校全体で取り組んでいる実践ではないということである。この実践を積極的に発信していき、学校全体で体系的に児童理解とチーム支援ができるようになるのが課題である。二つ目は、課題は、教師の多忙と多忙感の解消である。この課題2点を解決するための共通点は、学年だけで行うのではなく、学校全体で実践を行うことである。来年度は、児童支援引き継ぎシートを使用しながら児童理解と支援チームの定着をはかり、児童と教師の両方のウェルビーイングを達成していきたいと考える。

参考文献

群馬県 (2021) 第2期群馬県教育大綱

文部科学省 (2021) 「令和の日本型学校教育」の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～ (答申) 中央審議会

文部科学省 (2022) 生徒指導提要